

芥川だより

編集発行人 下村嘉明

発行所着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2-14-3

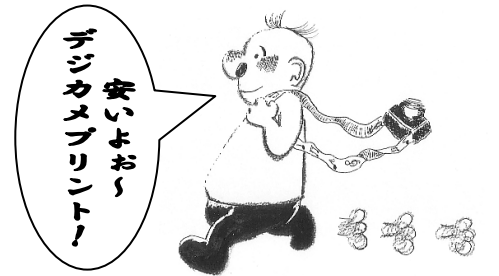
TEL072-681-8870

発行日/2007年8月20日

ご希望の方にはお送りします

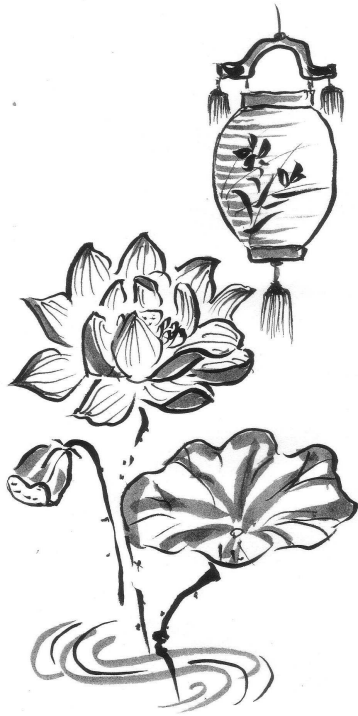
お気軽にお問い合わせ下さい。

e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp



芥川の写真屋さん

「お盆」



村を見渡せる山の中腹に、死者を埋葬する墓があった。私の子どものころは土葬の風習がまだ残っていた。その墓とは別に、自然石を並べただけの小さな墓、戦没者の石碑を建てた墓などが村の中にいくつもあったが、それは家々の墓標のようなもので、先祖のお骨が納められているわけではない。◆8月12日、お盆前日の夕暮れ時、先祖の仏さんを迎えるために迎え火を燈す。墓の前に大きな桐ノ木の葉をしき、その上にナス、キュウリ、団子などのお供えを飾り、それから岸辺に松明を突き刺して火をつけ、仏さんを迎えるのである。松明は、一尺ほどの竹を軸にして小さく切った松の木をわらで巻き付けたものだ。松明を焚く場所は家ごとに決めている。盆暮れの15日にも、同じ時刻、同じ場所で送り火を焚く。◆胸が膝にすれるほどに腰が曲がった祖父が、両手でにぎった杖をたよりに急な野道を登ってくる。夕闇が周りの山野にせまっていた。私は頼まれた供え物や松明を抱えて、祖父を待つ。祖父は、いつもの場所に着くとさっそく火打ち石を取り出して火をおこし、松明につける。松脂を含んだ松の木はよく燃える。供え物を並び終えると、祖父はキセルに刻み煙草を詰め込み、火をつけて一服する。◆私は、今晚のそうめんのことで頭が一杯であった。つけ汁のだしにはふだんは煮干を使うのだが、「今夜は、鮎のあぶっておいたのを入れて食べよう」と母が言っていた。あぶり鮎をそうめんのにせて食べると、それはもう断トツに美味しい。麺との相性が絶妙だ。私は早く、そうめんを食べたくて仕方がなかった。松明の燃え尽きるのが、いまかいまかと待ち遠しかった。◆しかし、祖父は先祖を迎える作法を頑固に守っていた。そんな村に伝わる習俗は、いまはもう見られない。

よう」と母が言っていた。あぶり鮎をそうめんのにせて食べると、それはもう断トツに美味しい。麺との相性が絶妙だ。私は早く、そうめんを食べたくて仕方がなかった。松明の燃え尽きるのが、いまかいまかと待ち遠しかった。◆しかし、祖父は先祖を迎える作法を頑固に守っていた。そんな村に伝わる習俗は、いまはもう見られない。

芥川商店街歳時記

今月の予定

8月25日(土) 午後6時より 納涼子どもまつり

芥川小学校体育館・グラウンド

深奥幽玄手談の交わり

囲碁で豊かな人生を!



日本棋院高槻支部

芥川囲碁サロン

(株)入谷商会経営

日本棋院棋士谷村義行八段による

大盤解説毎月第二日曜日午後2:30より

指導碁毎月第二日曜日午後4:00より

高槻市芥川町2-10-11(芥川商店街)

TEL・FAX 072-682-0403(代)

年をとると考える能力がぶくぶくなくなる。何か忘れものをしたような、うつろな気持ちになってしまう。新聞は情報を細かに、おもしろいほど、そのあとテレビが追いかけている。好きなものだけ見て悪いことはないが、それだけ見ていると、頭の中がおかしくなっていく。電話をかけてみる。友達に話をする用もないが、声を聞けば、たちまち昔にもどる。出たことになかったクラス会にも出てくるようになったし、うれしい事だ。

過去の事などという必要もなし、いま元気で話が出来ればいい。過去にしがみつくと必要もなく、そこで発見するのは、昔の顔と同時に長い人生の道程である。

時折集まって、校歌、村歌など歌って、あそぶのは、どんなにか楽しい。ほとんど忘れてしまっている。これも一節一節つないで口にする。老いて、いまこんな体操するなんて、頭の音痴もよいとこ、アハハハと笑いにごまかしてしまふ。集まったら、いさぎよく金を使う。思い切って使ってしまった。新札、式千円札、あれには困った。みんな自分のための土産物を買う。或る時「五千円札で払った」「お釣りは」と待っている。店の人は知らぬ顔、「消費税込みのお釣りはありません」という。一方は、「イヤ、五千円で払った」

といって譲らない。どう落ちがついたかは知らない。いまだに、ナゾがとけず、あの人少し頭がおかしいのじやないか。用心、用心。年をとったら、なんだ思い違いする、平常頭の体操一、二、三、と。

平和の中で生きるか

「俺が死んだら初めて有難味がわかるだろう」とよくいう。その通りだと思っただけ。その時がきたら、思い知らされ、改めて必要性を痛感するに違いない。イヤ、人生たそがれ時に至ると、自分のことしか頭になく、一分たりとも自分のやりたいことをやる。双方ともうまくいくことはなかなかない。これはお互い様。

女は、私は、しいたげられてきた弱い存在だったことを強調する。だのに男の側も、いい分がある。男も負けず劣らず、しいたげられてきたのだということを強調する。つまるところ、男は戦いに生命をかけた。勝つか負けるかに賭けた。そして生き残った。女はなげく、「家の中にいる男なんて、勝つか負けるかが無くなって、平和が続くことなんかイヤなのだ」と。女はそうではない。暮らしを守ることを強いられた。朝な夕なに耐える、老父母の命令にだまって御飯をつくる。つまり男は、非常時を常時となすべしと

運命づけられ、腹のシンに教えこまれ、そう生きて、そう死んだのだ。それが男の戦うべく戦争というもの。

戦争を知らない子どもたちヨ。こんな事を起こしては、自分達が、オノレたちが泣くだけだよ。平和な社会とは、勝つものがいて、負けるものがいて、時代ものの画面のような社会ではないヨ。それでは、平和な社会とは、どんなといわれても私にはわからない。すきあらば、相手を刺そうと四六時中、ひそかに刃ものといでいる日々を、平和とはいえないだろう。相手の考え方、違いがあれば、はつきり認める賢さをお互いに磨かねばなるまい。ボケないための努力を

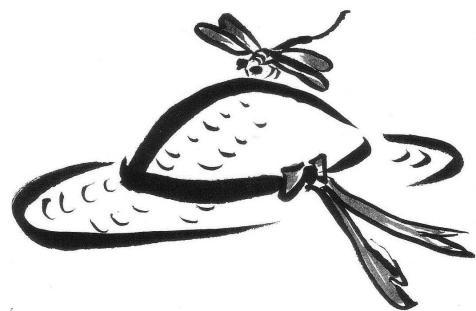
似顔絵の出店もありて 寺の秋

無題

年金、医療、介護、少子化対策など問題は山積みしている。将来に希望を持ちたいし、当選した議員さんにも申す。私達の期待に応える為、しっかりした議論をとばせてほしい。揚げ足ばかりとっていいは、全然前が見えてきませんよ。不安のない、明るいニュースが展開してくる日を心待ちにする八十路のバアさんのつぶやき。選挙結果どうあれ、畑の雑草に熱をいれて頑張る人もいる事を忘れないでほしい。

はったい粉

はったい粉に砂糖を混ぜたものを紙にのせて家の前に座りこんでなめる。



友達の分までもって行って、お互いに鼻の頭や口のまわりが白くなっているのがおかしくて笑い、むせるだけでなく、顔中はったい粉だらけになった。

「こうせん」と書かれたはったい粉が売られていた。香煎の意味らしい。一般的な呼び名としては「はったい粉」だが、麦焦がしともいう。いろいろな説と共に、八月ともなれば、ほろにがい思い出が脳裏をかすめてゆく。

孫達を見ると、何だか馴染めない味らしい。はったい粉を非常食に、又おやつので用になった世代も、私の年代くらいだろうか。

大雪山縦走

梵店主

入山四日目、快晴の朝を迎えた。気温はマイナス一六度。十勝三俣でマイナス二〇度以下を経験しているせいか、さほど寒いとは感じない。M蔵の熱は三七度以下に下がっている。「大丈夫、行動できる」とM蔵はいう。この好天を逃すわけにはいかない。六時前にキャンプサイトを出発した。

周りの景色は白銀に輝いて、まぶしい。文字どおり大雪の山地だ。北側を見おろすと、白く凍った大雪湖が姿を見せている。その湖から南にのびる深い谷が石狩岳の懐深くまでくい込んでいる。石狩川だ。進む先には石狩岳が秀麗な姿を見せている。

久しぶりに浴びる陽の光のなかを、稜線どおしに順調に進み、四時間あまりで石狩岳に達した。頂きに立ち、四方を展望する。三人はそれぞれ地図を見ながら周りの山々を同定していく。よっちゃんの出発前に読んだ古い登山紀行を思い出していた。

それは日本近代登山の先蹤者といわれる大島亮吉がつづいた「石狩岳より石狩川に沿うて」という紀行である。大島が語る北海道の自然は鮮烈だった。一九二〇年（大正九）夏の記録であるが、いつの時代でも、読むものに新鮮な感動を起こ

すにちがいないと思う。

大島は二十一歳である。よっちゃんとは歳は変わらない。大島の紀行を読んで、彼の感受性の豊かさ、観察の深さに胸を打たれたのだ。

トムラウシを目ざしてクワウンナイの谷をさかのぼっていると、森林乱伐の痛々しい姿が両岸に現れる。森林を伐採したために斜面は崩壊し、根こそぎなぎ倒された若木や巨岩が川床に累々としている。「人間の置いた森林乱伐と言う小さな破壊に端緒を有する自然それ自身の破壊力の狂暴さ」に驚愕する。たくさんいるはずのイワナも消えた。この崩れた谷の姿を目の当たりにして、「大きな驚きと怖れと深い悔いとを人間は懐かざるを得ない」と大島は嘆くのだ。

谷は深く陽が当たらないところが多い。陰鬱な感じが谷いっぱいにも充満していた。山案内人の浅市が近づいてきて、「オヤジの足跡がたくさんある」と耳許でそつとささやく。

不気味な空気がいつそう濃くなる。

オヤジの痕を登るんだ」と、もう一人の案内人、嘉助がいう。「柔らかい土、藪、雑木を薙ぎ倒し、踏みじって通った荒々しい痕はさすがに『オヤジ』といわゆる『森の主（あるじ）』の仕業と思わせるに充分である」。

身動きもとれないくらいに密生した繁みの中でつかんだ木の樹皮に、人間の

古い痕跡を発見する。こんな山奥に人が……と「軽ろからぬ驚き」が大島の胸を打った。嘉助にたずねると、アイヌのタシロ（山刀）の痕だという。そして、まだ見ぬ北の異族の姿を思い浮かべ、イメージの羽を広げる。「手負いの熊（ヒグマ）の森陰深く遁（のが）れ行くその血に滲（にじ）んだ足痕を執拗に追い続けて、この深く暗い榛莽（しんぼう）の間を分けて、またそのうちに隠れて行ったアイヌの落ち窪んだ眼窩の底に光る柔和な眼光、隆（たか）く秀でた鼻、半顔を埋めたその漆黒の頬髭などをまざまざと浮かべてみた」。

「……と痛ましい凄然たる光景である。これらのみなトドマツの風倒木でその樹幹は一間近くの直径が充分にあると思われるほどの巨木である。この広大な地域においてその巨木を壊すように手易く、あるいは幼児が玩具を壊すように手易く、あるいはもつと造作もなく、吹き払い、なぎ倒し捻じ折ってこの谷一杯に渦巻いた計り知れぬ強暴な旋風の空と地を震撼せしめた光景を想像して自分はまたも戦慄したのである」。よっちゃんは、息をのんで読んだ。

大島は石狩岳の頂上に立って、こんな感慨をもらす。四周の視界に入るものは

「人間味の少ないあるいは全くこれまでに人間との交渉を少しも有していない山々谷々のみであることを知り、しかもその奥深い核心をなすこの地点に立つ自分たち四人の存在を思うと一種恐怖の感情にも相似た強い自然の圧迫を感ずる。まるで、この二つの足痕の所有者の間に非常な距離の介在するものとは思えない。この両者を同じく『オヤジ』という称呼に含めているのも、そんなに無理なことではなさそうだ」と思う。大島の感性ははなはだ鋭い。

よっちゃんの脳裏に焼き付いた、凄惨な自然の描写がある。広々とした川床、さらに遠い両側の傾斜地まで、巨木が累々と折れ重なり、相横たわっている。それが前方にまですつと続いている。な

自然の前ではわれわれは取るに足らない存在なんだ、という恐ろしい自然の圧迫をひしひしと感じた。

自然の前ではわれわれは取るに足らない存在なんだ、という恐ろしい自然の圧迫をひしひしと感じた。

ルートツ(4)

きびきびと看護の仕事をする式部にタケシはあつい思いを寄せ、式部もその思いを受けとめて、まじめで温和なタケシに惹かれてゆく。二人が恋に落ちるのに時間はかからなかった。

出遭った翌年には、二人は東京で共同生活を始める。タケシは商社に就職し、サラリーマンとなった。式部はタケシひとすじに身も心も傾けていた。そんな式部をタケシはいとおしく思う。二人は結婚を真剣に考えていた。

大正という時代は、女性が自分の意思で生きることを求めはじめた時代である。大正の「新しい女」は自己を主張し、自由に恋愛をするようになる。

明治時代は女性はさげすまれ、自分の意思で生きる権利はほとんどなかった。結婚、離婚の自由はない。結婚した女性は夫に従属するものとしてきびしく貞操を要求され、子を産んで家の血統を守ることが務めとされたのである。また、結婚前の娘は「きずもの」であってはならなかった。

女性に貞操を強要しながら、没落した士族や貧しい小作農の娘たちは遊郭に売られていった。紡績工場や製糸工場の女工として働きに出るのも、身売り同然である。それは親への孝である

とさえいわれた。家のために女性が犠牲になったのだ。いっぽうで貞節を義務づけられ、いっぽうでは快樂のための性として売られたのである。

また、農村でも都会でも男が妻子を捨てる現象が多く見られた。残された妻は年寄りや幼子を抱えて必死に生活を支えたのである。それは貧しさのどん底であった。

天皇制国家の基盤である「家」を守るために、女性が物のように扱われた時代である。その「家」意識を教育によつて国民に植えつけ、天皇に忠誠をつくす臣民に育てようという方針で発布されたのが教育勅語であった。

女学校への進学率が高まった明治後半、「家」を守る女性の役割をしっかりと教えようという教育目標がかかげられた。それが「良妻賢母」である。この「良妻賢母」という生き方に疑念をいだいたのが、『青鞥』につどった「新しい女」たちだ。彼女たちは自分の愛をこらぬき、世の非難や嘲笑にたじろぐことなく自由な恋愛を実践した。

鉄幹には身重の妻、林滝野がいた。そんな鉄幹のもとに晶子は、恋焦がれるらしい歌を送りつづけた。やがて晶子は鉄幹と結ばれ、鉄幹を独り占めしてしまう。世間は自由恋愛と非難するが、晶子はひるまなかつた。鉄幹との間に一ダースもの子をもうけている。

平塚明子(らいてふ)は青鞥社を立ちあげる前に、夏目漱石の愛弟子、森田草平と心中事件を起こす。けつきよく未遂に終わるのであるが、たいへんスキャンダラスな事件だった。その後、海禅寺の和尚と肉関係を結び、やがて歳下の絵描き、奥村博史と出遭う。奥村との愛に浸るようになるが、法的な結婚を拒否し、共同生活を続けた。

そういう私生活の中身を『青鞥』の後記で赤裸々につづっている。アナーキスト大杉栄をめぐる女たちは激しい。大杉は、他の男から奪い取った堀保子と長く同棲していた。そこに神近市子という新聞記者と、『青鞥』の編集にたずさわる伊藤野枝が加わり、三つどもえの張りつめた恋愛が交差する。大杉は、自由恋愛の三条件を三人に提示する。お互い経済的に自立すること、同棲せず別居すること、互いの自由(性的関係も)を尊重すること、という大杉の勝手に都合のいい条件であった。やがて事件は起こる。大杉が単身で泊まっているはずの葉山日陰茶

屋に市子が訪ねた。ところが、そこに野枝の姿があった。市子は約束を破られた怒りがこみあげ、短刀で大杉の喉を刺してしまうのである。大杉の周辺ではむしろ市子に同情的で、野枝に反感が集まった。大杉は十日ほどで退院するのである。市子は二年の懲役刑を受け、保子は雑誌に、大杉との関係を絶つという広告を発表した。

野枝は、十七のとき故郷の福岡で結婚するが、一〇日も経たず出奔し、平塚らいてふを慕って東京に出た。青鞥社に通いながら、英語教師の辻潤と同棲生活に入る。辻との間に二人の男の子をもうけるが、二十一のとき乳飲み子の次男を連れて、大杉のもとに走るのである。大杉との間には一男四女をもうけた。関東大震災後まもなく、大杉と大杉の甥の宗一(六歳)とともに憲兵大尉の甘粕正彦に連行され、激しい暴行を加えられたうえ、絞殺されてしまう。三人の遺体は古井戸に投げ捨てられた。野枝、二十八歳であった。

大正の終わりのころになると、自由恋愛はみだらな行為ではないと考えられるようになったが、それがそのまま家制度を超えて結婚に結びつくまでにはいたったわけではなかった。

タケシと式部の生活もやがて破綻を迎えることになる。

学徒出陣

昭和十六年（一九四二）は、私にとって思い出がたくさん詰まった楽しい年でしたが、日中戦争が拡大し、日本は戦争への総動員体制となって、国民統制がきびしくなってゆきます。食糧は不足し、木炭やマツチなどの生活必需品は切符制となりました。「贅沢は敵だ」といわれた時代です。言論統制、教育統制が強化されました。

女学校の家政科の授業では女子の務めをきびしく指導されましたが、次第に正課の授業が、慰問袋の作製や兵隊さんの肩章づくりに変更させられることが多くなります。料理の授業では、食材がありませんから手に入るものを工夫してこしらえたものです。指導する先生はだいぶ頭をひねったことでしょう。そのときの料理法は戦時中の疎開先でたいへん役に立ちました。やがて出征する先生が多くなって、授業が円滑に行えないようになります。

運命の日、昭和十六年一月八日をむかえます。肌寒い日でしたが、東京の空はぬけるように澄んでいました。日だまりの校庭のベンチでお友だちと話をしているときです。真珠湾奇襲によって米国への開戦を知らされました。

「あつ！ やった」というなんともいえない感慨がわきました。いっしょにいた友だちも、言葉が出ないという感じでした。ほんとうにあの瞬間はカラリとした不思議な気持でした。それまでは重苦しい空気がただよっていました。そのなかで抑えられていた人々の感情が、開戦によって一気に爆発したのです。その日から日本は熱狂と興奮につつまれます。太平洋戦争の勃発です。米英にたいする緒戦の勝利に国民は酔い、ますます戦争熱が高まっていくのです。

日本の上空で戦闘があるわけではありませんが、日本では平常と変わらぬ日々が過ぎていきました。それから一年後には半年繰り上げられた卒業をむかえ、地方からの友だちは親元に引き上げていきました。その卒業前、昭和十七年九月に、明治神宮の外苑競技場において第一回の学徒出陣壮行会が挙行されました。学徒出陣というと、昭和十八年一〇月に文部省が主催して行われた雨の中の壮行会が有名ですが、それより一年前に天皇陛下がご臨席されて壮行会が行われたのです。

外苑は学校から歩いて一時間半ほどのところにあるのですが、その外苑を埋めつくすほどのたくさんの学生が集まりました。戦局の悪化にともない、兵力補充のために集められた若者たちです。これ

ほど多くの人々が身近で陛下にお逢いできるなどいうことは、いままでになかったことです。

この壮行会で、私は学校から指名を受け、校旗をもって先頭に立って行進したのです。はじめてのことなので、たいへん緊張しました。そのときの様子が新聞に掲載され、友だちが新聞の切り抜きを送ってくれました。

この日は風が強く、砂ほこりが舞っていました。そんな砂ほこりのなか陛下は、広い神宮外苑の広場に各地から集まった学生に向かって、高い台の上に立ったまま挙手の礼をくずさず、式典のあいだ中ずっと謁見されてきました。そのお姿は私の脳裏に焼きついて、いまでも消えることはありません。

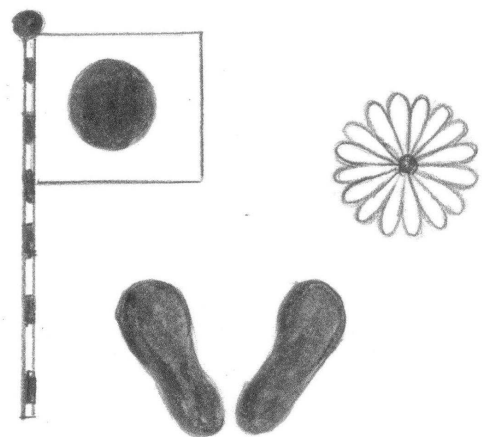
昼頃から始まった式典は三時半頃に終了しましたが、その間、一寸の動きもなす。その陛下のお姿は若者たちに深い感銘を与えたにちがいありません。

式典が終わり陛下が退場されたあと、台上を見ると、砂ほこりの中に足跡がくつきりと残されていました。将来さまざまな分野で活躍が期待され、日本の未来を担っていくであろう若者たちを、戦場に送らなければならぬ、そのことに深く心を痛められていたのではないかと思います。

外苑に集まった学生たちのほとんど

は、生きてふたたび本土の土を踏むことはありませんでした。

私は、二年半ともに過ごした鹿児島の人と別れるのが辛くて、名残惜しさから二人で銀座へ出かけました。友人は私に記念に鏡を贈ってくれました。私は、ケース入りの日本人形を贈りました。そのとき彼女はすでに結婚が決まっていた、故郷に帰れば、さっそく結婚準備のこと。結婚の日取りも決まっています。三日。「人生とは余裕のないものね」といって、鹿兒島へ発つてゆかれました。逢うは別れのはじめかとか……、一期一会の思い出。嬉しくもあり、哀しくもあり。



◇魚あれこれ◇

タコ(蛸) ③

周防春日丸

かなり古くから行われている蛸壺漁は、昼間は穴に入って隠れているタコの習慣を利用した漁法である。

蛸壺には焼き壺とプラスチック製とがあり、割れやすい、軽くて動きやすいなど、一長一短があり、漁場(海底)の状態によって使い分ける。形もかめ形・徳利形・筒形・丸形・イイダコ用などがある。今は使われていないが、餌のアカバ(アカテガニノ好物で赤い色を好むらしい)を入れて置き、タコが入ると蓋が閉まり出られなくなるプラスチック製の蓋付き壺もある。

それでは蛸壺漁とは……、我が家の蛸壺漁を紹介します。

まず焼き壺(かめ形)の底の穴に「しりつぼし」という綱を入れて口縄を縛り、タコ綱に八尋(尋は両手を左右に伸ばした長さ)、すなわち一二、三メートル間隔で壺を縛ってアジロ(魚場)により、三〇〇〜六〇〇個の壺を入れて置く。この壺をローラーで繰り上げてタコを獲るわけである。

アジロと呼ばれる場所には、タコ綱の端には発泡スチロールのウキを付ける。昔から漁師は「山を見る」といつ

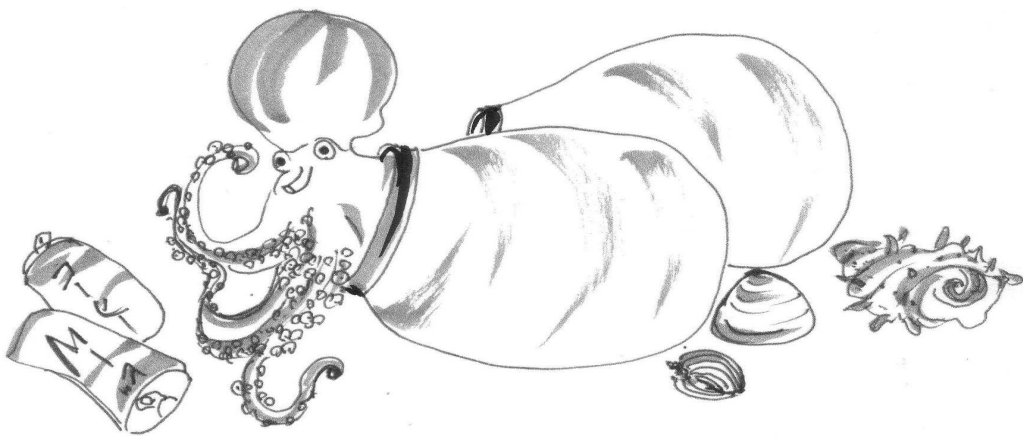
て、山と山の喰い合いで場所を特定するものであったものが、今やGPS(全地球測位システム)で簡単に見つけられるというわけである。

このウキを「みざわ」と呼ぶ長カギで引っかけて取り、ローラーにかけて巻き上げ、次から次と壺が繰り落とされていく。

壺にタコがいれば海水より濃い塩水(洗剤の空容器、インジラップなどに作って置く)を壺の口から、目をねらってピューと勢いよく吹き付けておいて、木づちで壺の底あたりを叩くと、タコの足が、おそるおそるだったりドサツという感じで出てくる。

タコは一杯ずつ赤い綱の袋(玉ねぎ用の袋に似ている)に入れてから、生簀で生かしておく。袋に入れない頃には生簀に「おどろ」というものを入れて生かしたのである。「おどろ」とは、柔らかくて弾力があり折れにくくタコを傷つけにくいおなご(女)楡やねずみもちの木を縛ったものをいう。タコが混み合い、からんだり、けんかをしたり、だんご状態にならないように居場所(かまる場所)を確保するために入れていたのである。

続けてタコが上がってくると、甲板を動きまわるもの、つかまえて袋にと思えば足を広げて吸い付くもの、墨を



吐くもの、丸くなるもの、嬉しく楽しい忙しさである。

タコもさることながら、壺の中もなかなか興味深く面白い。たつのおとしご、「海ほおずき」というアカニシ貝の卵、腹に吸盤を持つ魚(名前は不明)、シヤレた貝殻から珍しいカニ、うちわえびなど……。タコと一緒に、貝・カニ・アナゴなどの餌はもちろんであるが、タイラギ貝の殻から、コーヒー・ビールの空き缶、ビニール袋、使い捨てライター、石まで、何でもかんでも取り込んで身を守るためのバリケードにしている。

そう見られるものではないが、時に壺に卵を産み付けてある。この房状の卵が藤の花の顔に見えるところから「海籐花(かいとうげ)」と呼ばれる。ぶどうの房にも見えなくもないが……、プチプチして珍珠である。体内にある段階では「蛸の子」、象牙色の袋に包まれているから「蛸の袋児」とも呼ばれる。

四月中旬から始まった蛸壺漁もお盆を境に、仕掛けを上げて終わりを迎える。

川柳 真本嘉代子

- ☆ 人の価値長い道筋ものを言う
- ☆ 着古した藍染服お気に入り
- ☆ 夏祭り商店街は蝉しぐれ

読者からのたより

「芥川だより」楽しみにしています。私も母との思い出があります。昭和二十一年、小学校入学した当時、食が細く、食べ辛く華奢な身体でした。そんな時、母は鶏小屋から温い卵を取って、自分の前掛けでふいて、前と後ろに穴をあけ、「さあ、これを飲んで学校へ行きな」と言葉をかけて見送ってくれた。根気よく、笑っていた母。お陰様で速く正しく楽しんで生きてこられた。

Iさん

「芥川だより」発行されて、早一年が経ちました。小生一号から集めております。何事も続けるという事が大切で、これが又大変なこと、ご苦労お察し申しあげます。私のように街のどこかで次号を待ち侘びる者もおりますので、どうかいつまでも発行して下さい。

朝から止むことなしに降っていた雨も漸く上がったのか雨音がしなくなりました。

「芥川だより」がやっと読み終わったところです。富士登山の思い出、息を呑む思いで私まで山登りをしているようでした。本当に良い尊い経験をさせてうらやましいです。私には高嶺の花です。登山の素晴らしさ、それに伴う危険を毎回の連載で想像出来ませぬ。若さと希望のたまものだと思います。

先日は雨の中、はるばると丹波の山奥までようこそお出で頂きましたことお礼を申し上げます。半信半疑でお待ちしております。居りましたら元気な皆さまの顔を見せて頂き本当にうれしくお迎えさせて頂きました。山に咲いたササ百合もさぞ満足していることでしょう。山主としても最高の喜びです。

これから暑さも加わってきます。緑一面の山々に小鳥のさえずりが聞こえてきます。平和な一日が送れますように。

Sさん

夜市のグランマの店の報告

先日行なわれました、芥川商店街の夜市に「芥川だより・グランマの店」として、はったい粉・水あめを三十円で売りました。準備しました分は完売しました。およそ四く五十人のお客様がありました。皆さんの「懐かしい！」という言葉が、店を手伝って頂いたみなさんを励まし、来年もやろうね。という気持ちにしてくれました。みなさんありがとうございます。売上は三千八百円なり。来年は、自家製のはったい粉・あられ等を考えますので、知恵をお貸しください。

「芥川だより・ハイキングのお誘い」

暑さのために休んでいましたハイキングを九月より再開したく思いますので、時間の都合のつく方は参加して楽しみましょう。

日時／九月六日（木） 九時梵集合
予定コース／

編集後記

お盆の過ごし方も変わってきた。何処かへ出かけるでもなく高校野球を日がない一日見ている。人の混む所は疲れる。車の遠乗りも気が進まない。正月と盆の特別な日々であった想いが薄らいでしまった。

今の生活は過去の儀式を簡略化して、快樂なる容易さに流される怠惰な心と、金儲けに奔走する資本主義社会にあって、人々がロボット化してしまった結果でもある。魂が抜けたロボットは止めどなく漂流し続けるだろう。

こんなことを考えていたら、突然自由に出て来る盆休みが舞い込んだ。千載一遇のチャンスとばかり、間に合わせの登山用具をザックに詰め込んで夜行バスに乗った。行き先を何処にするか迷ったが、出発二時間前にバスの予約センターに電話したら、たまたま一つだけ当日の座席が空いていたので迷わず決めた。

バスの行き先は、立山・室堂。

テントや一週間分の食料を詰め込んだザックはかなり重い。我が身も九十キロであるから無謀と言えない。しかも、十年以上のブランクがあるから、友達に相談する気にもならない。反対されるに決まっているからだ。しかし、縦走出来たのである。禁酒・禁煙が効いたのである。（嘉）

残暑お見舞い
申し上げます